

『琴歌譜』 一二番歌・所伝部考

藤原 享和

一、はじめに

『琴歌譜』は、その発見から今年（二〇二四年）で満一〇〇年を迎えるが、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』に比べればまだまだ先行研究も少なく、一般的な認知度も決して高いとは言えない。発見された写本（現在までに発見されている写本は一本のみ）は奥書に「天元四年」（九八一年）とあることから、一〇世紀後半の書写であることがわかる。原本の成立時期については主に以下の諸説が行われているものの、確定は難しい。

1、平安朝初期頃説……神野富一「琴歌譜の『原テキスト』成立論」¹

2、弘仁初年説……土橋寛「陽明文庫所蔵古歌謡集の解説 一 『琴歌譜』」²

3、弘仁年間（八一〇～八二四）頃説……植山茂「都の音色——京洛音楽文化の歴史展——」図録³

4、八六五年下限説……西宮一民「琴歌譜に於ける二、三の問題」⁴

5、寛平年代（八八九～八九七、宇多代）下限説……賀古明「琴歌譜の大歌」⁵

いずれの説を取るにしても成立は平安時代前期であるが、中古文学の研究者から顧みられることは少なく、上代歌謡研究の立場から論及されることが多い。これは、発見者である佐佐木信綱が「新たに知られたる上代の歌謡に就いて」⁶において「自分は、数年前、東京なる近衛家に於いて、万葉集目録を発見し、それを学界に紹介したことがあつたが、この琴歌譜は、同じく数百年來篋底に秘蔵せられ、随つて、学者の耳目に触れざりし文献で、巻中、未だかつて世に知られなかつた上代の歌謡十数首を含んでをる。即ち、紀記万葉等に収められてある以外に、上代の歌謡十数首が、この書の発見によつて、新たにわが歌謡史の上に加はつたのである。多年上代及中世の歌謡に就いて研究してをる自分にとつては、この発見は夢にはあらずやとたどらる、ばかりの喜ばしき

であつた。」と書いているように、『琴歌譜』に上代の成立とみられる歌の記載があることが主たる理由であろう。

しかし、『琴歌譜』に記載されているのは歌のみではない。「茲都歌」、「余美歌」等の歌曲名、歌詞、譜付歌詞等に加えて一部の歌にはその歌の所伝といふべき散文部が附されている。私は、『琴歌譜』の発見によつて「新たにわが歌謡史の上に加はつた」のは「上代の歌謡十数首」だけではなく、「上代の歌謡と所伝」、正確に言つと「平安時代前期の大歌所が管掌していた歌謡と所伝」であると捉えたい。

なお、従来、多くの研究者はその部分を「縁起」（傍線は藤原による。以下同じ）または「縁記」と呼んできた。しかし、『琴

歌譜』の中に「縁起」という語は見えない。「縁記」は「琴歌譜」に見えるが、一番歌に付随する二種類の散文部と一九、二〇番歌の同部分のみに用いられている語であつて、『琴歌譜』のその他の歌に付随する散文部までも「縁記」と表現するのは妥当とはいえない。そこで私は前稿（『琴歌譜』所伝部の記述意識⁸⁾、以下「前稿」といふときはこれを指す）において当該部分を「所伝部」と呼称することとした。今後はこの呼称が術語として定着して欲しいとの願ひも込めて、本稿以降も「所伝部」という語を用いる。ここに『琴歌譜』の歌と所伝部を一覧表にして掲げる（所伝部をもたない歌については、当該歌の冒頭部のみ掲げた（「」内は訓読文）。

『琴歌譜』歌・所伝部一覧表

註：（ ）内は割注、傍線は藤原による、グレイ部は「日本書紀」「古事記」に同一歌のあるもの、所伝部を持たない歌の歌詞は冒頭部のみ掲げた。

歌番号	歌曲名	歌詞	所伝部①	所伝部②	所伝部③	同一歌（歌番号）
一	茲都歌	原文 美呂呂都久也多麻可吉都安万須多尔 可毛与良牟可美乃美也碑等 訓読文 みもろにつくやたまかさ つあます たにかもよらむ かみのみやひと	原文 右古事記云大長谷若建命坐長谷朝倉呂治天下之時 遊行美和河之時邊有洗衣童女其容姿甚麗天皇聞其 童女汝者誰子答曰己名謂引田赤猪子天皇詔汝不嫁 夫今將召汝其女仰待天皇之命既經八十歲天皇已忘 先事徒過盛年而賜歌云時赤猪子之淚泣恚濕其所服 之丹摺袖答其大御歌而詠此歌者此縁記与歌異也 訓読文 右、古事記に云はく、大長谷若建命、長谷の朝倉 宮に坐しまして、天の下治らしめし時、美和河 に遊行しし時、辺に衣洗へる童女有りき。其の容	原文 一説云弥麻貴入日子天皇々子卷向玉城 宮御宇伊久米入日子伊佐知天皇子妹登 次入日女命登於大神美皇呂山拝祭神前 作歌者此縁記似正説	九四	

[illegible]

一一	山口扶理	夜万久知「やまくち」……			
(歌番号ナシ)	大直備歌	〔与片降同歌唯音節別耳〕			
一二	余美歌	原文 蕪良美豆夜万止乃久尔波可无可良可阿利可保之支久尔可良可須美可保之支阿利可保之支久尔波阿伎豆之万也万止 訓読文 そらみつ やまとのくには かむから か ありかほしき くにからか すみ かほしき ありかほしきくには あき つしまやまと	原文 卷向日代宮 御宇大帯日天皇久御坐於日向国厭辺夷之処倭倭国之宮斯乃述眷恋之情作懷旧之歌 訓読文 卷向の日代宮 御宇しし大帯日天皇、久しく日向国に御坐して、辺夷の処を厭ひ倭の国を懷はしたまひ、斯に乃ち眷恋の情を述べ懷旧の歌を作りたまふ。	原文 一云大長谷天皇未即位間初欲殺兄坂合部黒日子皇子与甥目弱王此時二王子通行到於葛木津守村大臣家匿〔原表記「述」〕天皇遣使乞臣固争不出二王子与大臣並可殺此時大臣女子韓日女娘注云即天皇妃也見其父被殺而即哀傷作歌者 訓読文 一に云はく、大長谷天皇未だ位に即きたまはざる間に、初め兄坂合部黒日子皇子と甥目弱王を殺さむと欲ほしき。此の時二王子遁れ行きたまひて葛木津守村大臣の家に到りて匿りたまひき。天皇使ひを遣はして乞ひたまひしかども臣固く争ひて出し奉らざりき。二王子と大臣並て殺す可しと。此の時大臣の女子韓日女娘、注に云はく、即ち天皇の妃也、其の父の殺さるるを見て即ち哀傷みて作る歌てへり。	
一三	宇吉歌	原文 美奈蘆曾久於美能遠等米保陞理刀利可多久刀札 一説云刀良左祢茲多何太久夜可多久刀札保太利刀良須古 訓読文 みなそそく おみのをとめ ほだりと り かたくとれ したかたく やかたくとれ ほだりとらすこ	原文 古事記云大長谷若建命坐朝倉之宮治天下之時長谷之百枝楓下為豊樂是日亦春〔原表記「巻」〕日之遠杉比売獻大御酒之時天皇作此歌 訓読文 古事記に云はく、大長谷若建命、朝倉の宮に坐しまして天下を治めたまひし時、長谷の百枝楓の下にて豊樂為たまひき。是の日、亦、春日の遠杉比売大御酒献りし時、天皇此の歌を作りたまひき。		
一四	片降	阿良多之支「あらたしき」……			
一五	長埴安扶理	可波可美乃「かはかみの」……			

一六	一七	一八	一九	二〇
阿遊随扶理		酒坐歌二		
原文 多可波之乃美可為乃須美豆阿良万久乎須尔久於伎伊旦未久乎須尔久於伎天奈尔可奈可許々尔伊天々乎留須美豆訓読文 たかはしの みかろのすみづ あらまくを、すくにおきて いてまくをすくにおきて なにかなここに いてをる すみづ	伊須乃可美「いすのかみ」……	阿佐可利尔「あさかりに」……	原文 許乃美伎波和可美支奈良須久之乃可美止許与尔伊万須伊波多々須々久奈美可美乃止余保支毛止保之可无保支久留保之万川利己之美伎曾阿佐須乎西佐佐訓読文 このみきは わかみきならず くしのかみ とこよにいます いはたすすくなみかみの とよはきもとほしかむほさくるほし まつりこしみきそあさすをせ ささ	原文 許乃美支乎可美介无比止波曾乃川々美字須尔太字太比川々可美介礼可毛之未比川々可美介礼可毛之己乃美支乃安也尔宇太々乃之佐々訓読文 このみきを かみけむひとは そのつづみ うすにたて うたひつつ かみけれかも しまひつつ かみけれかも しこのみきの あやにうたのしささ
原文 大帯日子天皇々后尾張国孕任忽焉臨座以使着奏天皇即時遣使者召上到春日穴杭「原表記「杭」邑所生王子（稚帶日子太子）天皇大歡喜即歌者訓読文 大帯日子天皇の皇后、尾張国にて孕任みまし、忽焉ちにして産むに臨み使者を以て奏す。天皇即時に使者を遣はし召上げたまふに、春日の穴杭の邑に王子（稚帶日子太子）を所生みたまふ。天皇大いに歡喜びたまひ、即ち歌ひたまふといへり。			原文 酒坐歌二縁記 日本記云磐余稚桜宮 御宇息長足日畔天皇之世命武内宿祢從品隨皇子令拌角鹿箭飯大神至自角鹿足日皇太后宴太子於大殿皇太后拳觴以寿于太子因以歌之訓読文 酒坐歌二縁記 日本記に云はく磐余稚桜宮 御宇しし息長足日畔天皇の世に、武内宿祢に命せたまひ品隨皇子に從はせて角鹿の箭飯大神を拌みまつら令む、角鹿より至りましに、足日皇太后、太子を大殿に宴したまひき。皇太后觴を挙げ太子を寿きたまひ、よりて歌ひたまふ。	
			三三	三三
			三九	四〇

二二		滋良宜歌	
原文		阿志比支乃夜万多乎豆久利夜万多可良 （一説云也万多可美）志多比乎和之西 （一説云布須世）志多止比尔和可止布 豆万志多奈支尔和可奈久豆万（一説云 可多奈支尔和可奈久豆万）許曾許曾伊 毛尔夜須久波多布例	
訓読文		あしひきの やまたをつくり やまた から（一説に云ふ やまたかみ）し たひをわしせ（一説に云ふ ふすせ） したとひに わかとふつま したなき に わかなくつま（一説に云ふ かた なきに わかなくつま）こそこそい もに やすくはたふれ	
原文		滋良宜歌縁 日本記に遠明日香宮 御宇雄朝婦稚子宿祢天皇代 立木梨輕皇子為太子也奸同〔原表記「聞」母妹 輕大娘皇女乃悞懷少息仍歌者今案古事記云日本記 之歌与此歌尤合古記但許曾己曾之句古記不重耳 （古歌抄云雄朝豆万稚子宿祢天皇乎衣通日女〔原 表記「晏」王寢時作歌者）	
訓読文		あしひきの やまたをつくり やまた から（一説に云ふ やまたかみ）し たひをわしせ（一説に云ふ ふすせ） したとひに わかとふつま したなき に わかなくつま（一説に云ふ かた なきに わかなくつま）こそこそい もに やすくはたふれ	
原文		日本記に曰はく、遠つ明日香宮 御宇し雄朝婦 稚子宿祢天皇の代に、木梨輕皇子を立てて太子と 爲したまふ。同母妹輕大娘皇女に奸けて乃ち悞懷 り少しく思む。仍りて歌ふといへり。今古事記に 云ふを案ふるに、日本記の歌と此の歌尤も古記に 合ふ。但し許曾己曾の句に至りては、古記に重ね ざるのみ。（古歌抄に云。雄朝豆万稚子宿祢天皇 衣通日女王と寝たまふ時に作りたまへる歌といへ り）	
六九		七八	

二、問題の所在

所伝部は全ての歌ではなく特定の歌にのみ附されていること、
所伝部を複数有する歌と一つしか持たない歌があること、『日本
書紀』と同一の所伝を記しているものや、『古事記』の所伝を記
しながら歌と当該の所伝の結びつきを否定して別の所伝を記して
いるもの等があることなどから、『琴歌譜』のそれぞれの歌と所
伝に対する意識、延いては平安時代前期の大歌所の「歌と所伝」
についての意識まで採れる可能性があるのであるが、『琴歌譜』

発見以降の先学の多くは、『琴歌譜』の縁記に『古事記』と異な
る所伝と歌の結びつきが記されていても、「其の内容から言つて
どうしても臣の娘がよんだ作とは見られず、古事記の所伝に随ふ
べきだ」（木本通房⁹⁾、「この歌は、このような急迫の場で歌つた
ものとは考えられないから、この伝来は、よくない。」（武田祐
吉¹⁰⁾、「第二番目の縁起の文末に記してあるように、韓日女自身が
父の殺されるのを悲しんで歌つたとするには妥当性がない。
この歌謡と縁起との習合の姿は、現存古事記と同伝の第一番目の
縁起の方に妥当性が多い。」（賀古明¹¹⁾）というように、「古事記の
所伝に随ふべきだ」、「この伝来は、よくない」、「妥当性がない」

等と一蹴してしまっていた。

しかし、例えば『琴歌譜』一三番歌（『古事記』一〇三番歌とはほぼ同一の歌）には、『古事記』の要約である所伝部①（所伝部の番号は前掲『琴歌譜』歌・所伝部一覽表）に対応する。以下同じ。）と、全く内容の異なる別の所伝部②が記されているが、所伝部①のもとで解釈しようとする（『古事記』一〇三番歌をその歌謡物語の中で解釈する）と歌と所伝を不自然に摺り合わせるプロセスが必要になるのに対して、所伝部②のもとでの解釈にはその必要がない。歌と所伝の組み合わせに全く齟齬がないためである。『琴歌譜』一三番歌と所伝部①はさながら独立歌謡とそれを組み込んだ歌謡物語の関係であるのに対して、同歌と所伝部②の関係は狭義の物語歌と歌謡物語の関係のようである。この現象は『琴歌譜』一番歌とそれに附随する二つの所伝部についても同様である。これら以外にも『琴歌譜』には複数の所伝を記す歌があり、それは平安時代前期の大歌所に歌と所伝の結びつきは唯一無二のものでないとする発想があったことを意味する。加えて一番歌に附された二種類の所伝の末尾にそれぞれ「此の縁記と歌異なる也」、「此縁記正説に似たり」と記されているのを見ると、すでに当時の大歌所には（近代以降の歌謡研究者が課題とする）歌と所伝の結びつきを深く考究しようとする姿勢があったことがわかるのである（これらのことについての詳細は、両歌とそれぞれの所伝部について具体的に論じた拙稿¹²をご参照いただきたい）。このような事実を前にしたとき、上代から平安時代前期の歌謡

と所伝の結びつきを考える上で『琴歌譜』記載の歌と所伝部との関係を真正面から研究対象とすることを私たちははや避けて通ることができない。

そこで私は前稿において『琴歌譜』所伝部の記述原則、記述意識を探り、以下のとおりの結論を提示した。

①『琴歌譜』は『日本書紀』、『古事記』両方に見える歌三首、『古事記』のみに見える歌二首を掲載しているが、それらの歌には必ず所伝部を附す。

②『琴歌譜』所載歌のうち『日本書紀』に同一歌があるものは『古事記』にも同一歌があるが、この場合『琴歌譜』は『日本書紀』の所伝のみを掲載し、『古事記』の当該所伝には触れない。『琴歌譜』に記された『日本書紀』の所伝（『琴歌譜』所伝部）は例外なく歌とツキである。

③『琴歌譜』所載歌のうち『古事記』にのみ同一歌がある場合、『琴歌譜』は所伝部①に「古事記云」として古事記の要約を記すが、それらは必ず歌とハナレた伝承であり、所伝部②に「一説云」「二云」としてツキの所伝を記す。

④一番歌所伝部の「此の縁記と歌異なる也」、「此縁記正説に似たり」という表現に象徴されるように、『琴歌譜』の所伝部は、歌と所伝の結びつきに對する強い関心、検証的態度をもって記述されていると考えられる。

私は前稿を締めくくるにあたり、『琴歌譜』に所伝部が附された歌は、『日本書紀』、『古事記』に見える歌以外にも三首ある。

本来ならば、これらの歌と所伝部との関係について、また、『琴歌譜』所載歌の多くを占める所伝部をもたない歌の特性についても統一的な説明がなされるべきであるが、現在のところ説得力のある結論には到達していない。いずれ稿を改めて論じたい。」と自らに宿題を課した。本稿ではその宿題の中から、まず『日本書紀』、『古事記』に見える歌以外^⑬の三首のうち一二番歌を取り上げて、歌と所伝部との関係を探ってみたい。

三、本文

『琴歌譜』一二番歌、同所伝部原文^⑭

正月元日余美歌

(歌詞)

蕪良美豆夜万止乃久尔波可无可良可阿利可保之支久尔可
良可須美可保之支阿利可保之支久尔波阿伎豆之万也万止^⑮

(所伝部)

卷向日代宮 御宇大帶日天皇久御坐於日向国厭辺夷之処
懷倭国之宮斯乃述眷恋之情作懷旧之歌

訓読文

正月元日余美歌

(歌詞)

そらみつ やまとのくには かむからか ありかほしき
くにからか すみかほしき ありかほしきくには あき
つしまやまと

(所伝部)

卷向の日代宮 御宇しし大帶日天皇、久しく日向国に御
坐して、辺夷の処を厭ひ倭の国を懷ほしたまひ、斯に乃
ち眷恋の情を述べ懷旧の歌を作りたまふ。

四、先行研究

『琴歌譜』一二番歌所伝部についての主な先行研究は以下の通りである。

ア、木本通房 一九四二年

琴歌譜によれば、景行天皇が熊襲御征伐に日向国におもむ
かせられた時、大和を偲び給うての御製で、いはゆる「国し
ぬび歌」の部類に属すべきものである。されば右の「大和」^⑯
は日本全体ではなくて狭く大和地方を指すのである。

イ、武田祐吉 一九五六年

この歌の由来に、景行天皇の望郷の歌とするは、適切でない。宮廷に仕える有識者の頌歌であるようだ。内容も堂々としており、調子も整っている。アリガホシの語は、「見がほし国は」（古事記五九）のように、古くは、シの形で連体形を作るべきに、アリガホシキ国と言ったのは、時代がやや降っているようにもある。しかし元日の行事には、ふさわしい歌曲である。万葉集に見られる、神から・国からの対句表現は、この歌あたりから来ているのだろう。（中略）日向国ヒムカノクニ。景行天皇が日向の国に行幸されたことは、日本書紀に、その記事がある。但し古語に東国をヒムカノクニというと思われるから、東国であるかもしれない。東国に行幸されたことも日本書紀に見える¹⁸。

ウ、賀古明 一九五六年

古事記、日本書紀、諸風土記、高橋氏文などの景行天皇に関する伝承を所収している古代古典に全くみあたらない。（中略）日本書紀、景行天皇（中略）十七年の条に、「春三月戊戌朔己酉。幸^三子湯原^一。遊^三子丹蒙小野^一。時東望^三之^一。謂^三左右曰^一。是国也直向^三於日出方^一。故号^三其国曰日向^一也。是日陟野中大石^一。憶^三京都^一而歌之曰。」とあって、次の歌謡

愛しきよし 我家の方ゆ 雲居立ち来も （紀21）

『琴歌譜』一二番歌・所伝部考

倭は 国のまほらま 畳づく 青垣 山籠れる倭し美し
（紀22）

命の 全けむ人は 畳薦 平群の山の 白檀が枝を 髻華に挿せこの子 （紀23）
があり、次に「是謂^三思邦歌也^一」とある伝承は、琴歌譜の縁起が、景行天皇の西方行幸に関しており、しかも、その縁起の最後に「懐旧之歌」と記してあり、更に、「よみ歌」そのものの歌謡としての性格内容が所謂思国歌であることも対応する。（中略）なお、用字法上から、この縁起の「巻向日代宮御宇大帶日天皇」の用字が略、古事記の系統に属するものであるとしても、その他の用字、及び内容からみれば、この縁起は全般的には、日本書紀系統のものとみるべきものである¹⁹。

エ、小西甚一 一九五七年

琴歌譜の注記によれば、景行天皇が久しく日向国に在って、田舎が厭になり、大和を恋しく思ってお作りになった望郷の歌だとあるが、もちろん事実かどうかわからない。しかし、もともと正月の慶歌でなかったのを、歌詞がめでたいので、慶歌に転用したことは、本当らしい²⁰。

オ、高木市之助 一九六七年

景行天皇が、日向の国にあつて大和国をしのんで歌はれたものと言ふのである。事實はとにかく、国をしのぶ歌が、国をほめることになつてをり、元旦の慶祝の歌に使用されたものであることは、推測出来るものである⁽²¹⁾。

カ、島田晴子 一九七三年

この歌は記紀にも載せていないが、詞章は記紀・万葉によく見られるもので、始めから宮廷歌謡として作られたらしく、整備された形をもっている。武田氏「全譜」は、景行天皇の望郷の歌とするのは適切でないとしながらも、元日の行事にはふさわしい歌謡であるとしている。作者と伝える「大帯日天皇」には、「子」が脱字している⁽²²⁾。

キ、神野富一 一九九七年

西征した景行天皇の日向の国での望郷歌だということで、日本書紀の、「倭は 国のまほらま 量づく 青垣山籠ること 倭しうるはし」などの「思邦歌」と同じ作歌事情であることになる。緑記は本歌の古さと由緒正しさを主張している。しかしこの際はそれを額面どおり受け取るにはあたるまい。昔、大和讃歌をうたつたのは日向での景行天皇であつた、というほどの知識が、従前の歌句を取り合わせて作成した大和

讃歌である本歌に結び付けられて緑記となる、この程度の柔軟性や寛容は成立当時の作者も享受者も持ち合わせていただろう⁽²³⁾。

ク、神野富一 一九九八年

本歌は、それ以前の諸歌の表現を借りて、節会用に、比較的新しく制作されたものであろう（中略）景行紀一七年の条に、景行天皇が日向で「野中の大石に陟りまして、京都を憶ひたまひて」「倭は 国のまほらま 量^たなづく 青垣 山こもれる 倭しうるはし」などの「思邦歌」を歌つたことがみえるが、そこに本歌はみえない。前記のように本歌の制作は比較的新しいと考えられるが、大和讃めの内容であることが、景行天皇の伝承を引き寄せ、緑記とされたか。歌詞も緑記も擬古の作らしく思われる⁽²⁴⁾。

ケ、神野富一 二〇一二年

緑記には景行天皇が日向の国で故郷大和を偲んで作つた歌とされ、歌の現場でもそうした由緒のものとして受容されたのかもしれないが、後付けの感は免れない⁽²⁵⁾。

五、歌と所伝部の独自性

賀古明が「古事記、日本書紀、諸風土記、高橋氏文などの景行天皇に関する伝承を所収している古代古典に全くみあたらない。」（前節ウ）と述べるように、『琴歌譜』一二番歌の所伝部は少なくとも現存する上代資料には見えないのであるが、所伝以前に一二番歌そのものが『琴歌譜』以外の文献には見いだせない。『古事記』、『日本書紀』に歌が見えないのであるから、それに伴う所伝も両書にないのは当然である。

しかし、歌詞も所伝も完全に現存の上代の文献に見える表現と無関係かといえそうではない。まず歌詞を見ると、以下の通りそのほとんどの表現が『万葉集』や『続日本紀』に見いだされるのである。該当する表現に傍線を附し①～④の記号で対応関係を示した。点線（用例力）は同一語句ではないが⑤ありかほしきに続く表現として近似のものである。

『琴歌譜』 一二番歌

① ② ③ ④ ⑤
 ① そらみつ やまとのくには ② かむからか ③ ありかほしき
 ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
 き ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
 ① あきつしまやまと
 ア、み吉野の 小室が岳に 猪鹿伏すと 誰そ 大前に奏す
 すみしし 我が大君の 猪鹿待つと 呉床に坐し 白檮の 袖

『琴歌譜』 一二番歌・所伝部考

着そなふ 手舂に 蛸搔き着き 其の蛸を 蜻蛉早昨ひ 斯く
 の如 名に負はむと ① そらみつ 倭の国を 蜻蛉島とふ【美
 延斯怒能 袁牟漏賀多氣爾 志斯布須登 多礼曾 意富麻弊爾
 麻袁須 夜須美斯志 和賀淤富岐美能 斯志麻都登 阿具良爾
 伊麻志 斯漏多閉能 蘇弓岐蘇那布 多古牟良爾 阿牟加岐都
 岐 曾能阿牟袁 阿岐豆波夜具比 加久能基登 那爾淤波牟登
 蘇良美都 夜麻登能久爾袁 阿岐豆志麻登布】（『古事記』九七
 番歌）

イ、倭の 鳴武羅の岳に 猪鹿伏すと 誰かこの事 大前に奏す
 （割注略） 大君は そを聞かして 玉纏の 胡床に立たし
 （割注略） 倭文纏の 胡床に立たし 猪鹿待つと 我がいませ
 ば さ猪待つと 我が立たせば 手舂に 虻かきつきつ その
 虻を 蜻蛉はや囓ひ 昆虫も 大君にまつらふ 汝が形は置か
 む ① 蜻蛉島倭（割注略）【野磨等能 鳴武羅能陀該爾 之之
 符須登 拖例柯拳能居登 飢袁磨陞爾麻鳴須（割注略） 飢袁
 枳瀾簸 賊抛鳴枳柯斯題 拖磨磨枳能 阿娑羅爾陀陀伺（割
 注略） 施都魔枳能 阿娑羅爾陀陀伺 斯磨都登 倭我伊麻
 西麼 佐謂麻都登 倭我陀陀西麼 陀俱符羅爾 阿武柯枳都
 枳都 曾能阿武鳴 娑枳豆波野俱誓 波賦武志謀 飢袁枳瀾爾
 都羅符 儺我柯陀播於柯武 娑岐豆斯麻野麻登（割注略）】
 （『日本書紀』七五番歌）

ウ、泊瀬朝倉宮御宇天皇代「大泊瀬稚武天皇」
 天皇御製歌

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳尔
 菜採須兒 家告閑 名告紗根 ① 虛見津 山跡乃國者
 押奈戸手 吾許曾居 師吉名倍手 吾己曾座 我許背齒 告目
 家呼毛名雄母 (『万葉集』 卷一・一番歌)

工、高市岡本宮御宇天皇代「息長足日廣額天皇」

天皇登香具山望國之時御製歌

山常庭 村山有等 取與呂布 天乃香具山 騰立 國見乎為者
 國原波 煙立龍 海原波 加萬目立多都 怜何國曾 ① 蜻嶋

オ、養老七年癸亥夏五月辛于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首 (『并短歌』)

瀧上之 御舟乃山尔 水枝指 四時尔生有 刀我乃樹能

弥継嗣尔 萬代 如是二々知三 々芳野之 蜻蛉乃宮者

③ 神柄香 貴將有 ④ 國柄鹿 見欲將有 山川乎 清々

諾之神代從 定家良思母 (『万葉集』 卷六・九〇七番歌)

カ、春日悲傷三香原荒墟作歌一首 (『并短歌』)

三香原 久迹乃京師者 山高 河之瀬清 住吉迹 人者雖云

在吉跡 吾者雖念 故去之 里尔四有者 國見跡 人毛不通

里見者 家裳荒有 波之異耶 如此在家留可 三語著

鹿脊山際尔 開花之 色目列敷 百鳥之音名束敷 ⑤ 在果石

住吉里乃 荒樂苦惜哭 (『万葉集』 卷六・一〇五九番歌)

キ、群臣を内裏に宴す。皇太子、親ら五節を舞ひたまふ。(中略) 因て御製歌に曰はく、「①+③そらみつ大和の国は神から

し貴くあるらしこの舞見れば【蘇良美都 夜麻止乃久尔波 可未可良斯 多布度久安流羅之 許能未比美例波】」(『続日本紀』 卷第一五・天平一五年五月五日条。『続日本紀』二番歌)

アは雄略天皇が吉野の阿岐豆野に行幸、御獨したときの御製とする『古事記』の歌謡物語中の歌。歌詞の通り我が国を蜻蛉島と呼ぶ地名起源譚である。イは『日本書紀』に記載されたアの類歌であり、物語部もほぼ同じであるが、地名起源譚にはなっていない。ウは雄略天皇の大和国支配の歌として『万葉集』の巻頭に置かれる歌、エは舒明天皇の大和望国の歌として『万葉集』でウに次いで配列される歌である。オは元正天皇の吉野離宮(歌の中では「蜻蛉乃宮」)行幸時の笠金村の歌、カは田辺福麻呂が廢都恭仁京を詠んだ歌である。キは天平一五(七四三)年五月五日、恭仁宮の内裏で行われた宴で、天武天皇創始の伝承を持つ五節舞を女性皇太子阿倍内親王(後の孝謙・称徳天皇)に舞わせて元正太上天皇に貢つたのを受けた御製で、「大和の国は神国であるゆえに、尊く思われる。この五節の舞を見ると、一層深くそう思われる。」と歌う。藤原氏の血を引く皇統を強引に維持すべく立てた異例の女性皇太子を、聖武天皇(母は藤原宮子)が群臣の前で元正太上天皇や橘諸兄に認めさせるといふ、皇統にとって重要かつ緊迫した場面である。

このように「ありかほしき …… すみかほしき」の対句的表現の類型として掲げた力を除くと、いずれも、我が国の統治や呼

称にかかわる歌謡物語、天皇の支配・統治にかかわる万葉集冒頭の二首の伝承歌、天平時代の皇位継承にかかわる重要な儀式での御製であり、『琴歌譜』一二番歌の各句は天皇統治を歌う表現として、少なくとも宮廷で歌にかかわる人々の間で奈良時代末までには周知のものとなっていたはずである。

武田祐吉は「時代がやや降っているようにもある」(前節イ)、神野富一は「それ以前の諸歌の表現を借りて、節会用に、比較的新しく制作されたもの(中略)本歌の制作は比較的新しいと考えられる(中略)擬古の作らしく思われる」(前節ク)と述べるが、『比較的新しく制作されたもの』、「擬古の作」ではなく、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』、『続日本紀』に見えるような天皇統治にかかる奈良時代の言語環境の中で、この歌もまた生まれてきたと考えるのが自然ではないか。それが伝承されて文字化されたのが『琴歌譜』一二番歌なのである。『続日本紀』二番歌は「琴歌譜の正月元日の余美歌を踏まえた作らしし。」とする見解(つまり『琴歌譜』一二番歌の成立を七四三年以前と見る)も出されている。つまり、奈良時代から伝承のある歌を『琴歌譜』が記録したのであり、その意味では、『古事記』、『日本書紀』が物語とともに伝承した歌を『琴歌譜』が記録した五首(一、一三、一九、二〇、二一番歌)と違いはない。

では所伝部についてはどうか。「『琴歌譜』歌・所伝部一覧表」に示したとおり、『琴歌譜』のうち所伝部を伴っているのは一、二、一二、一三、一六、一九、二〇、二二番歌の八首のみであ

る。所伝部を持たない歌の方が多いことを見ても、『琴歌譜』において所伝部が必須のものでないことは明らかである。『琴歌譜』は所伝とともに伝承されていない歌に新たに創作してまで所伝部を附したとは考えられない。所伝部は歌とともに伝承されてきたものが記されたと考えるのが妥当である。

所伝部を持つ歌は八首であるが、『古事記』、『日本書紀』に見える歌はすべてそれらの物語部を所伝部に記している(『古事記』の物語部と歌の結びつきについて『琴歌譜』は否定的であるが)のであるから、『古事記』、『日本書紀』に見えない一二番歌は当初から当然直接両書に見えない所伝とともに伝承され、『琴歌譜』はそれを所伝部に記したと考えられる。

ただ、武田祐吉(前節イ)、賀古明(前節ウ)、神野富一(前節ク)も述べているように、景行天皇日向行幸のことやそこで御製をなしたことは次の通り『日本書紀』に見える。

十七年の春三月の戊戌の朔にして己酉に、子湯泉に幸し、丹波小野に遊びたまふ。時に東を望みて、左右に謂りて曰はく、「是の国は、直に日出づる方に向けり」とのたまふ。故、其の国を号けて日向と曰ふ。是の日に、野中の大石に陟りまして、京都を憶ひたまひて、歌して曰はく、

愛しきよし 我家の方ゆ 雲居立ち来も
倭は 国のまほらま 畳づく 青垣 山籠れる 倭し麗し

命いのちの 全またけむ人は 豊たけなみ薦こも 平へぐり群ぐみの山やまの 白しろ樾くわが枝えを 髻う
 華はに挿させ 此このの子
 とのたまふ。是こゝを思おも邦くに歌うたと謂いふ。(「景行紀」一七年三月一二
 日条)

しかし、左に示す『琴歌譜』一二番歌の所伝部を見ると、これが右の『日本書紀』の所伝から出たものでもなければ要約でもないことは明白である。

卷向の日代宮 御宇しし大帯日天皇、久しく日向国に御坐して、辺夷の処を厭ひ倭の国を懷ほしたまひ、斯に乃ち眷恋の情を述べ懷旧の歌を作りたまふ。

「『琴歌譜』歌・所伝部一覽表」の中で、一、一三、一九、二〇、二一番歌それぞれの所伝部①に掲げたように、『琴歌譜』は『古事記』、『日本書紀』の伝承を引く場合『古事記』や『日本書紀』の物語部を要約して記すが、この二一番歌の所伝部は『日本書紀』からの引用や要約とは全く違う。景行天皇が日向で京都(『日本書紀』・倭(『琴歌譜』)を思つて歌つたという要素以外に用字も含めて共通点はない。この所伝部は、『日本書紀』とは別個に一二番歌とともに伝承されて来たものである。

賀古明(前節ウ)は「用字法上から、この縁起の「卷向日代宮御宇大帯日天皇」の用字が略、古事記の系統に属するものである

としても、その他の用字、及び内容からみれば、この縁起は全般的には、日本書紀系統のものとするべきもの」と述べるが、これも当たらない。「大帯日」は確かに「古事記」の「大帯日子」と対応し『日本書紀』の「大足彦」とは違う。しかし「古事記」も『日本書紀』も景行天皇の宮の場所を「卷向」ではなく「纏向」と表記する。「卷向」の表記は他の天皇の宮を含め『古事記』にも『日本書紀』にも見えない。「卷向」は『万葉集』に多く用いられる表記であるが、

動神なるかみ之 音耳おとのみみ聞 卷向まきむく之 檜原山ひばらの乎 今け日かみ見みつ鶴鴨るかも (『万葉集』
 卷七・一〇九二番歌)
 卷向まきむく之 檜原ひばら丹立にたて流 春霞はるかすみ 鬱おほ之思者にしもは 名積米なづみこめ八方やも (『万葉集』
 卷一〇・一八二三番歌)

のように集中では地名として用いられており、宮のある場所を示す表記として「卷向」を使うのは大同二(八〇七)年撰上の『古語拾遺』に「卷向玉城朝」(垂仁朝)とある(ただし、景行朝は「纏向日代朝」と記される)のが早い。なお、『尾張国風土記』逸文に「卷向珠城宮御宇天皇」(吾縵郷)、『住吉大社神代記』にも「卷向玉木宮御宇天皇」(山河奉寄本記)、「卷向日代官大八嶋食知」(船本等本記)等と見えるが、前者の採択元は前田家本『釈日本紀』であつて鎌倉時代を遡らず、後者の成立時期についても奈良時代説から平安時代中期説まで幅があり、『古語拾遺』

に先行する資料とは確定できない。³⁰⁾

つまり、『琴歌譜』一二番歌所伝部は、用字、内容とも『琴歌譜』成立以前のいかなる現存文献にも依らないのである。

六、まとめ

以上の考察から、『琴歌譜』一二番歌の歌と所伝部との関係は以下の通りと結論づける。

『琴歌譜』一二番歌はそれ以前の現存文献に見えないが、新しい時代に儀式用に創作されたものではなく、天皇統治にかかる奈良時代の言語環境の中で生まれてきたものと考えられる。

『琴歌譜』は所伝部の記載を必須としないことから、所伝部が所伝とともに伝承されて来た歌のみ所伝部が記載されていると考えられる。

一二番歌も所伝とともに伝承されて来たものと考えられるが、所伝部の用字・内容とも現存のいかなる文献からの統一的な引用関係も認められない。一二番歌の所伝は現存文献とは別個に成立し、歌とともに伝承されて来たものと考えるべきである。

(凡例)

・『古事記』、『日本書紀』、『琴歌譜』の歌謡番号は土橋寛・小西甚三校注『日本古典文学大系3 古代歌謡集』一九五七年、岩波書店(一九八三年、第二七刷)による。

・漢字は引用であると否とを問わず原則として現在通行の字体を用いる(『万葉集』の引用については使用テキストの字体をそのまま用いる)。

・文献の引用や参照に際して初版(初刷)本以外を用いた場合は、初版(初刷)の発行年のほか()内に当該版(刷)の発行年、版(刷)を示す。初版(初刷)本を用いた場合はその発行年のみを記す。

・『古事記』、『日本書紀』、『続日本紀』歌謡については必要に応じて歌詞の校訂本文表記を【 】で括って示す。

・客観的な記述を担保するため、研究者名の敬称を省く。(使用テキスト等)

『古事記』山口佳紀・神野志隆光校注・訳『新編日本古典文学全集1 古事記』一九九七年、小学館(二〇〇一年、第一版第四刷)、『風土記』植垣節也校注・訳『新編日本古典文学全集5 風土記』一九九七年、小学館(二〇〇六年、第一版第五刷)、『日本書紀』小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『新編日本古典文学全集2 日本書紀①』一九九四年、小学館(二〇〇三年、第一版第三刷)、同『同3 同②』一九九六年、同(二〇〇二年、第一版第四刷)、『住吉大社神代記』田中卓・田中卓著作集7 住吉大社神代記の研究』一九八五年、国書刊行会(一九九二年、再版)、『万葉集』木下正俊校訂『万葉集 CD・ROM版』二〇〇一年、塙書房、『古語拾遺』西宮一民校注『古語拾遺』一九八五年、岩波書店、『続日本紀』青木和夫・稲岡耕二

・笹山晴生・白藤礼幸校注『新日本古典文学大系13 続日本紀二』一九九〇年、岩波書店、『琴歌譜』影印〔『琴歌譜』一九二七年、古典保存会〕により藤原が翻刻。翻刻にあたって疑義のある場合、注(3)(21) 揭示書及び神野富一・武部智子・田中裕恵・福原佐知子「琴歌譜注釈稿(二)」(四)〔『甲南国文』第四三〇四六号 一九九六年三月〜一九九九年三月〕も参照し参考にした。訓読は藤原による。

注

- (1) 神野富一『ヨム・ウタフ・琴歌 万葉歌古代歌謡論攷』二〇一九年、翰林書房。初出は『国語と国文学』第七五巻第五号、一九九八年五月、原題同じ。なお同「琴歌譜の成立過程」同書所収。初出は『万葉』第一六四号、一九九八年一月、では「平安初期頃であろうといわれている」とする。
- (2) 土橋寛『古代歌謡の生誕と構造 土橋寛論文集 中』一九八八年、塙書房。初出は『陽明叢書国書篇第八輯 古楽古歌謡集』一九七八年、思文閣出版。なお、初出では「弘仁年間」とする。
- (3) 京都文化博物館学芸第二課植山茂・鈴木忠司編『都の音色―京洛音楽文化の歴史展―』(二〇〇二年四月六日〜同年五月一二日、京都文化博物館に於いて行われた特別展「都の音色―京洛音楽文化の歴史展―」図録、二〇〇二年、京都文化博物館、一四三頁「琴歌譜」項目(当該部分執筆は植山茂)による。
- (4) 『帝塚山学院短期大学研究年報』第七号、一九五九年一月。なお、同論文は「上限は平安の極く初期を出ることは絶対が無い」とする。
- (5) 賀古明『琴歌譜新論』一九八五年、風間書房。初出は『季刊文学・語学』第五〇号、一九六八年二月、原題同じ。
- (6) 『芸文』第拾六年第壹号、一九二五年一月二日
- (7) 二二番歌の所伝部に「茲良宜歌縁」とあるが、これは「縁記」の「記」が脱落したものか本来「縁」であるのか不明。
- (8) 『京都語文』第三一号、二〇二四年二月。
- (9) 木本通房『上代歌謡詳解』一九四二年、東京武蔵野書院、一六九頁
- (10) 武田祐吉『記紀歌謡集全講』一九五六年、明治書院、三八〇頁
- (11) 賀古明「琴歌譜の有縁起歌」(『琴歌譜新論』一九八五年、風間書房。初出は『国学院雑誌』第五七巻第三号、一九五六年六月、原題同じ)。
- (12) ①拙稿「『琴歌譜』一番歌と縁記」(拙著『古代宮廷儀礼と歌謡』二〇〇七年、おうふう。初出は『同志社国文学』第五七号、二〇〇二年二月)。

②拙稿「古事記歌謡論」（拙著『上代歌謡と儀礼の表現』二〇二一年、和泉書院。初出は瀬間正之編『「記紀」の可能性』（古代文学と隣接諸学 10）二〇一八年、竹林舎）

③拙稿「琴歌譜」一三番歌と縁記」（『文学・語学』第二二八号、二〇二〇年四月）

④拙稿「歌謡と芸能」（拙著『上代歌謡と儀礼の表現』二〇二一年、和泉書院）

⑤拙稿「独立歌謡の出自―宮廷歌謡転用の可能性―」（『歌謡―研究と資料』第一五号、二〇二二年一月）

(13) 都倉義孝「『歌謡物語』論」（同『古事記 古代王権の語りの仕組み』一九九五年、有精堂出版。初出は有精堂編集部『時代別日本文学史事典 上代編』一九八七年、有精堂出版。原題「歌謡物語」）の「歌謡物語」には、歌語り・歌物語と異なるきわだった特徴がある。それは、歌謡と地の文（物語部分）との結合の緊密度に程度の差が存在することである。他のジャンルの場合、〈ウタ〉の意味・内容と、〈モノガタリ〉部分との間に、一致を欠くというハナレの現象は全く存在しないかごく僅かであるが、歌謡物語においては、まったく一致しないというハナレの極から間然とするところなく合致しているというツキの極に至るまで、さまざまな程度があるのである。」という説明に倣い、歌と物語（所伝）の一致した状態を「ツキ」、不一致の状態を「ハナレ」と表現する。

(14) 同右

(15) 原本の発見されていない文献の場合は、諸写本を校合した文字列を「校訂本文」として掲げるのが一般的であるが、『琴歌譜』の場合は発見されている写本が一本のみであるので「校訂」作業そのものが不可能であって、当該写本の文字列を翻刻して掲げるしかない。ここで「原文」という表現を用いたのは「訓読文」に対して（写本の）「原文」という謂である。

(16) 歌謡部分は原文では小字二行表記であるが、本稿では大字一行表記に改めた。

(17) 木本通房『上代歌謡詳解』一九四二年、東京武蔵野書院、一六七―一六八頁

(18) 武田祐吉『記紀歌謡集全譜』一九五六年、明治書院、三七八頁。

(19) 賀古明「琴歌譜の有縁起歌」（同『琴歌譜新論』一九八五年、風間書房。初出は『国学院雑誌』第五七巻第三号、一九五六年六月、原題同じ）

(20) 土橋寛・小西甚一校注『日本古典文学大系3 古代歌謡集』一九五七年、岩波書店、四六八頁頭注（当該部分担当小西甚一）（一九八三年、初版第二七刷）

(21) 高木市之助『日本古典選 上代歌謡集』一九六七年、朝日新聞社、三四一―三四二頁頭注（一九七七年、新装初版）

(22) 島田晴子「琴歌譜の縁記について」(『琴歌譜から』二〇二一年、私家版。初出は『学習院大学国語国文学会誌』第一六号、一九七三年七月、原題同じ。)

(23) 神野富一「琴歌譜「余美歌」考」(注(1) 前掲書)。初出は『国語国文』第六六卷第九号、一九九七年九月、原題同じ。)

(24) 神野富一・武部智子・田中裕恵・福原佐知子「琴歌譜注釈稿(三)」(『甲南国文』第四五号、一九九八年三月。当該部分担当神野富一)

(25) 神野富一「琴歌譜歌謡の構成―「大歌の部」について―」(注(1) 前掲書。初出は『万葉語文研究』第八集、二〇一二年、和泉書院、原題同じ)

(26) 注(20) 前掲書、二二六頁頭注(当該部分担当は)土橋寛。

(27) 詳細は拙稿「『続日本紀』三番歌における「この豊御酒を厳献る」」(拙著『古代宮廷儀礼と歌謡』二〇〇七年、おうふう。初出は『甲南大学古代文学研究』第一号、一九九四年四月。原題「『続日本紀』三番歌における「この豊御酒を厳献る」について」参照。

(28) 注(20) 前掲書、二二七頁頭注(当該部分担当は)土橋寛。

(29) 大同元年とする写本もあるが、西宮一民『古語拾遺』一九八五年、岩波書店、一五九―一六四頁の考証により大同

二年とする。

(30) 『住吉大社神代記』成立時期に関する主な説は以下の通りである。

①西宮一民「現存本は、仮名遣からみると、天暦時代(九四七―九五六)を過ぎてから、長保時代(九九九―一〇〇三)以前、すなわち平安朝前期の終りから中期の始めにかけて「書かれた」ものである」(『住吉大社神代記の仮名遣』(西宮一民『日本上代の文章と表記』一九七〇年、風間書房。初出は『万葉』第六三号、一九六七年四月、原題「仮名遣を通して見たる住吉大社神代記」)

②坂本太郎「平安時代おそくは元慶年間(八七七―八八五年―藤原注)」以後の造作である」(『住吉大社神代記』について)(坂本太郎『日本古代史叢考』一九八三年、吉川弘文館。初出は『国史学』第八九号、一九七二年一月)

③田中卓「天平三年(七三二)七月五日に、原本(四通)が撰述され(中略)延暦八年(七八九)(中略)本書(甲本)を《書写》した」(『再考・住吉大社神代記』(田中卓『田中卓著作集7 住吉大社神代記の研究』一九八五年、国書刊行会(一九九二年再版))

(ふじわら・たかかず 本学教授)